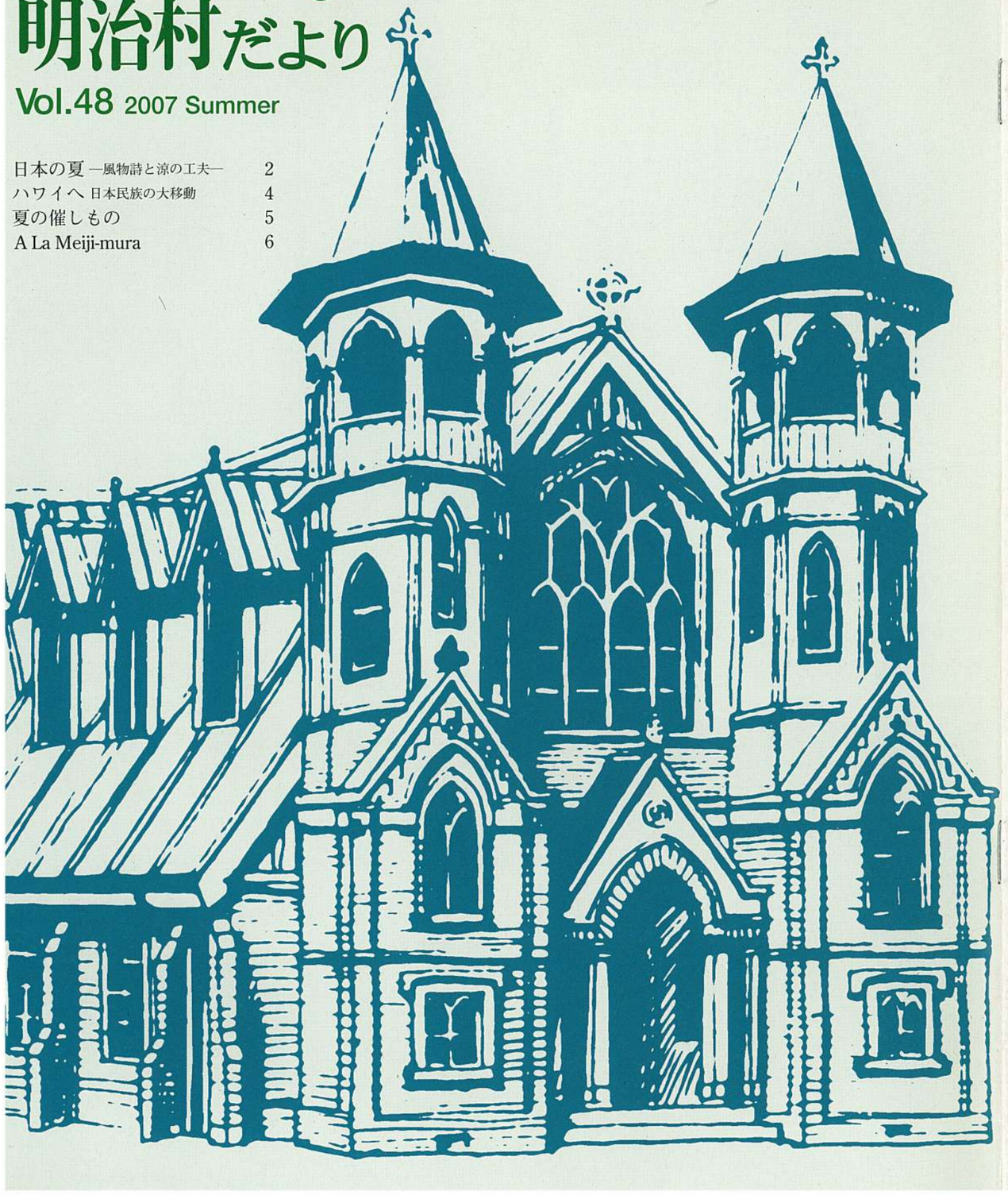
MEIJI-MURA

明治村だより

Vol.48 2007 Summer

日本の夏 —風物詩と涼の工夫— 2
ハワイへ 日本民族の大移動 4
夏の催しもの 5
A La Meji-mura 6

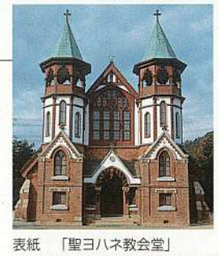


平成19年7月10日発行
「明治村だより」第48号（平成19年 夏）

発 行 博物館明治村
〒484-0000 愛知県犬山市内山一番地
電話（0568）67-0314
http://www.meijimura.com

製 作 大日本印刷株式会社

『明治村 だより』 第49号発行のお知らせ
発行時期 平成19年9月初旬（予定）
申込方法 「明治村だより」第49号ご希望の旨及びご住所・お名前を明記の上、送料140円の切手とともに封書にてお申し込み下さい。



表紙 「聖ヨハネ教会堂」
旧所在地 京都市下京区河原町通五條
建築年代 明治40年（1907）

お詫び
先号（Vol.47）11ページ最後から2行目に誤りがありました。お詫びし訂正いたします。
誤：昌正→正：昌生

日本の夏
——風物詩と涼の工夫——

はじめに

衣替えが済み、長い梅雨が明けると、いよいよ夏本番です。夏と言えば、七夕やお盆、風鈴やかき氷と、連想される行事や事物が数多くあります。その中には、昔から連綿と受け継がれている物がある一方、時の経過と共に失われてしまった風習や、新たな物に取って替わった物もあります。そこで、少し時計の針を戻し、明治の頃の夏の生活風景、とりわけ、先人が行ってきた涼を求める工夫を垣間見たいと思います。

写真1　東松家住宅　夏のしつらえ

（しつらえ前の部屋）

夏の訪れ

まず、江戸時代より人々に夏の訪れを告げたものの一つに、朝顔売りや金魚売りといった行商人が挙げられます。彼らは威勢の良いかけ声と共に町に繰り出しましたが、その中で風鈴売りは静かに売り歩き、吊るした風鈴の音色が町に鳴り響きました。風鈴は、涼しげな音と共に、短冊等が揺れるのを見ることで、視覚的にも風を感じることができます。

また、暑気を払う効能があるとされた妙薬を売り歩く、夏の薬屋、定斉売も町に現れました。彼らは天秤を肩に乗せ、薬箱の引き出しについている鐶をカタカタ鳴らしながら、照りつける太陽の下、笠もかぶらず売り歩き、自らの身体をもって薬の効き目を宣伝しました。

夏の物売りの中には他にラムネ売りや氷水（かき氷）屋もいました。ラムネは幕末に日本に伝わり、明治時代になると築地居留地をはじめ各地でラムネ屋が開店し、猛暑が続くと特によく売れたということです。氷水の歴史は古く、奈良時代には冬にできた氷を夏まで蓄える氷室があり、既にその頃から食べられていましたが、それはあくまでごく一部の貴族に限られており、庶民には手の届かない存在だったようです。その後幕末には少しずつ普及し、明治二年になると、横浜馬車道で町田房造が開店した氷水店ではアイスクリームも販売されるようになりました。

夏のしつらえと涼の工夫

さて、人々は夏の暑さをしのいで快適に住まうため、どのような工夫をしたのでしょうか。代表的なものとして、人間でいう所の衣替えと同様、建物を夏仕様に替える建具替え（写真1）が挙げられます。夏のしつらえに対する意識は、吉田兼好の「徒然草」の記述にあるように、平安時代には既に見られていたようです。

家のつくりやうは、夏をむねとすべし。冬は、いかなる所にも住まる。暑き比わろき住居は、堪へがたき事なり。

深き水は、涼しげなし。浅くて流れたる、遥かに涼し。細かなる物を見るに、遣戸は、蔀の間よりも明し（略）

（第五段）

建具替えは風通しを良くするということがねらいで、襖や障子をはずし、簾や簾戸に替え、畳の上に網代や籐むしろを敷く等を行います。ちなみに簾とは、細く裂いた竹や素木の削ったものを、縦糸を交差させながら編んだもので、もともと平安時代など、障子のない時代には、目隠しとして年中使われていたようです。また、簾戸も簾の一種ですが、障子や襖の代わりに用いられたもので、こちらには枠があり、開閉できるようになっています。これらによって強い日差しを遮り、風通しが良くなるだけでなく、庭の緑が透けて見えるなど、視覚的にも涼やかな効果を得られます。同時に畳の上に敷いた網代や籐むしろに素足が触れると、足の裏が冷たく感じられるわけです。

他に、屋外の壁に立てかけられるよしず（写真2）もあり、これは強い太陽の日差しを遮るためのもので、本来は朝のうちは東側に、夕方になると西側に移動します。よしずは、葦の細く長い茎を糸で編み連ねて、上下に割竹を付けてできています。葦は、元来アシと呼ぶイネ科の多年草ですが、アシの音が「悪し」に通じるのを忌み、「善し」にちなんでヨシと呼び習わすようになったとも言われています。

また、軒先から釣りしのぶ（写真3）が吊るされている光景もよく見られました。釣りしのぶとはシダ科の植物である「しのぶ草」の根茎を束ねて形作ったもので、船等を模したデザインからは水辺も想像でき、また、瑞々しい緑色の葉も爽やかな印象を与えます。

写真2　幸田露伴住宅「蝸牛庵」　よしず

写真3　幸田露伴住宅「蝸牛庵」
釣りしのぶ

この他に、現在と変わらず、夏には打ち水もよく行われました。打ち水とは、庭や道路といった家の周辺に水をまくことで、これにはいくつかの効果があります。一つには、埃を押さえ、掃除をしやすくすることと、更に、涼を呼ぶというものです。これは、水の透明感が与える印象だけではなく、実際に、まいた水が蒸発して水蒸気に変わる時に、周囲の空気から熱を奪うという、科学的な根拠もあります。

また、涼を求めて、風を起こす道具としては団扇が長らく使われていました。団扇は奈良時代に唐（中国）よりもたらされたもので、庶民にも一般的になったのは、江戸時代半ばでした。団扇の絵も「優美團羽画帖」（一九一八）（写真4）に見られるように様々で、水辺や金魚等涼しげなモチーフが好んで選ばれ、夏祭りや盆踊りが盛んになるにつれ普及しました。また、団扇には渋団扇という種類もありますが、こちらは実用本位で、丈夫にするため、防水・防腐効果のある柿渋を表面に塗った紙を竹の骨組みに貼り付けたものです。

更に、「千代田の大奥」（写真5）と題された錦絵には、扇風機の元祖とも言えるような、団扇を何本もプロペラのように取り付けた手動の扇風機が描かれております。明治期も中期以降になると、ドイツやアメリカ製の自動扇風機が出回っていましたが、それらは高価で、庶民には贅沢品でした。そして、明治二十七年には、最初の国産品が作られ、明治三十年の「国民新聞」に紹介されています。これは、頭部に電球がついていて、スイッチの切り替えで、電灯としても使うことができたそうです。その後扇風機は明治末年になると、徐々に家庭に浸透していきました。（写真6）

写真4　「優美團羽画帖」（1918年）

写真5「千代田の大奥　入浴」（部分）
楊州周延、明治28年

写真6　扇風機　明治40年製造

蚊対策

ところで、夏は暑さだけではなく、蚊にも悩まされます。それを、先人はどのように対処してきたのでしょうか。古くから室内で使われて来たのは蚊帳（写真7）です。蚊帳は麻布等で作った蚊除けのための装置で、天井から吊り下げ、部屋を覆います。奈良時代以前から使われていたようですが、その頃はまだごく一部の貴族しか使うことができませんでした。その後、室町時代に入ると武家層にも広がり、江戸時代に入ると大量生産が可能になったおかげで値段も安くなり、急速に普及しました。

また、明治二十年代に蚊取り線香が作られるまでは、江戸時代に使われていた蚊遣り（写真8）も使用されていました。蚊遣りとは、杉や松の葉、ヨモギやカヤを干したものなどをいぶし、その煙で蚊を追い払う装置です。その後、アメリカとドイツから輸入、栽培された除虫菊を使って蚊取線香が作られました。元々の蚊取り線香は、仏壇用の線香に除虫菊を混ぜたもので棒状だったため、写真のように蚊遣りも縦長になっているのです。しかしその後明治三十五年に、蚊取り線香の持ちを良くするため、線香の棒を太くして渦巻き状にしたものが製造され、現在おなじみの姿になっています。

写真7　森鷗外・夏目漱石住宅
蚊帳

写真8
西園寺公望別邸
「坐漁荘」蚊遣り

おわりに

以上見てきたように、冷房設備の整っていなかった時代、人々は想像力を働かせ、暑い夏を少しでも涼しく過ごすために、視覚や聴覚などの五感を使って多くの工夫を生活に取り入れてきました。そこからは、自然環境を自分たちに適応させるのではなく、自分たち自身を自然環境に適応させるといった姿勢が見受けられます。桜、新緑、紅葉、雪景色、と四季折々の表情を楽しめる日本。毎回いつの間にか季節が移り変わっているのだとしたら、少し惜しい気がしませんか。この夏は団扇片手に外に出て、天然の夏を味わってみるのも良いかもしれません。明治村でも七月中旬より、東松家住宅（2丁目18番地）や幸田露伴住宅「蝸牛庵」（3丁目26番地）といった日本家屋で夏のしつらえをご覧いただけます。この機会に先人の工夫を体感されてはいかがでしょう。

主な参考文献

・今戸榮一『続・江戸町人の生活』一九八七　日本放送出版協会
・中川武『日本の家　空間・記憶・言葉』二〇〇二　TOTO出版
・湯本豪一『図説　明治事物起源事典』一九九六　柏書房株式会社
・吉岡幸雄『京都の意匠—伝統のインテリア・デザイン』一九九七
（株）建築資料研究社

明治村の涼 ～8月31日まで

村の涼感

■ 明治の夏のくらし（村内各所）

風に鳴る釣りしのぶの風鈴、日差しを遮り柔らかな風を通す葦簀。
涼しく過ごすために知恵をだし、工夫をこらした明治の生活空間を再現します。

■ 明治の涼霧（ミスト）（帝国ホテル中央玄関前　森鷗外・夏目漱石住宅前　札幌電話交換局横　聖ザビエル天主堂前　鉄道寮新橋工場前）

涼霧が夏の暑さをいっとき忘れさせてくれます。

■ 盛夏の味覚（和食処「碧水亭」洋食屋「浪漫亭」ほか）

夏ならではの味覚を盛り込んだ限定メニューが勢ぞろい。

明治村トリエンナーレ'07 第2回 芸能・芸術祭 夏

“歴史的遺産を輝かせる、時代（とき）を超えた情熱と創造”をテーマに、3年に1度の文化の祭典「芸能・芸術祭」を11月25日まで開催しています。

■「吉本純情笑学校」芸能・芸術祭 夏の呉服座特別公演

吉本興業の芸人たちが繰り広げる笑いと涙の人情芝居です。
演目「呉服座座長は父の仇」

開催日	8月11日～19日
開演時間	11：00　13：00　15：00　17：00 18：00　19：00　（各30分、入替制）
観劇料	500円（小学生以上）
製作	吉本興業株式会社

宵の明治村

8月11日（土）～19日（日）

夜9時まで開村
浴衣の女性は終日入村無料、男性は割引料金でご入村していただけます。
荒天時は延長開村を中止する場合があります。

■ ライトアップ明治村「2007夏」

ライトアップで明治の建物と街並みが、昼間とは違う表情を見せてくれます。
村内を走るイルミネーションのボンネットバスと京都市電が「宵の明治村」を華やかに彩ります。

■ 花火競演　20：30～

宵の明治村をしめくくる鮮やかな花火の競演をお楽しみください。
〈強風・強雨など荒天中止〉

■ 9DAYS・JAZZナイト

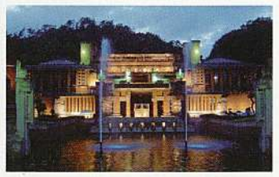
19：00～　20：00～
特設野外ステージでのお洒落なジャズコンサートを連日開催いたします。

■ 監獄屋台

明治21年に建てられた『前橋監獄雑居房』で味わう涼しげなひとときをお楽しみ下さい。

■ インペリアルビアガーデン

ライトアップされた『帝国ホテル中央玄関』前は、開放感いっぱいです。



●「宵の明治村」開催中は、犬山駅からの路線バスも時間を延長して運行。
※催事は予告なく変更する場合があります。悪しからずご了承ください。

〈お知らせ〉

芝川又右衛門邸

9月下旬公開予定

平成7年の阪神淡路大震災で被害を受け、平成17年から移築工事を行っていた芝川又右衛門邸が間もなく竣工します。建物の詳細については次号でご紹介させていただく予定です。

●メカウィーク関連事業●

〈(社)日本機械学会創立110周年記念事業〉にちなんで

「知ろう！ 体験しよう！ 明治の大発明『ガラ紡』」

特別開催

開催日：8月1日～7日
受付時間：10:30～11:30
受付場所：名古屋衛戍病院内

日時計が伝えた時刻

●菅島燈台附属官舎（3丁目30番地）

京都七条駅から市電に乗り品川燈台駅で下車すると、三重県の菅島にあった煉瓦造の菅島燈台附属官舎（重要文化財）（写真1）と燈台で使用されていた日時計（複製品（写真2）、実物は1丁目13番地三重県庁舎「明治の時計」展示室にて展示（写真3））があります。何故燈台に日時計が設置されていたのでしょうか。

燈台にとって日時計は装飾品ではなく必需品でした。燈台では、夕方の点灯、明け方の消灯の業務の際に正確な時刻を必要としました。しかし、開国したばかりの日本では現在のようにラジオやテレビなどから簡単に正確な時刻を知ることが出来ず、燈台では正確な平均太陽時（時計の示す時刻）を知るために日時計を使用していたと考えられます。

日時計は「日晷（にっき）儀」とも呼ばれ、太陽の日周運動による物体の影の長さや方向の変化から時刻（真太陽時）を知ることの出来る最も簡単な仕組みの時計の一つで、古代では季節などを知る天台観測器としても使用していました（写真4）。

写真1　菅島燈台付属官舎と日時計

写真2　菅島燈台附属官舎前に据えられている日時計

写真3　三重県庁舎に展示されている日時計

しかし、真太陽時では同時刻の影の位置が季節によって異なるため平均太陽時を定めることが出来ませんでした。そこで日時計から平均太陽時を求める場合には以下のことに留意して日時計を設置しました。①日時計の針に相当する三角形の板は正しく南北の方向に向け、傾きはその土地の緯度に正確に合わせる。②この時の南北とは、磁石の南北ではなく北極星で合わせた（合わせられない場合は磁石で偏角を測った）正確なものとする。

このように日時計を設置し、真太陽時と平均太陽時との差（均時差）を時差表（写真5）に照らし合わせて日時計に加えれば一分以内の誤差で時刻を知ることができました。

写真4　日時計が示す時刻

時差表

第二章　時

時計ガ太陽ヨリ早キ季節 月	日	時差 分	時計ガ太陽ヨリ遅キ季節 月	日	時差 分	時計ガ太陽ヨリ早キ季節 月	日	時差 分	時計ガ太陽ヨリ遅キ季節 月	日	時差 分
12	25	1	4	17	1	6	17	1	9	2	1
12	28	2	4	22	2	6	22	2	9	8	2
12	31	3	4	28	3	6	26	3	9	11	3
1	1	4	5	14	4	6	1	4	9	14	4
1	4	5	5	23	5	7	7	5	9	17	5
1	7	6	6	1	6	7	24	6	9	20	6
1	11	7	6	14	7	8	8	7	9	23	7
1	14	8				8	14	8	9	26	8
1	17	9				8	19	9	9	29	9
1	22	10				8	23	10	10	2	10
1	25	11				8	27	11	10	5	11
1	31	12				8	31	12	10	9	12
2	5	13						13	10	12	13
2	8	14						14			14

写真5
「時差表」『時計読本』

行の時刻法に改めました。汽車・電信の時刻は東京天文台から東京中央電信局内電信試験係の自働時報機に接続され電信で鉄道省東京通信所、中央郵便局等に伝えられました。毎日（日曜・祭日を除く）正午三分前になると全国の鉄道の電信線も郵便局の電信線も一般の通信を休止して東京に結ばれ、正午の時報を受信しました。船舶に関係する横浜、門司、長崎などの港務部でも同様の方法により時刻を知ることが可能でした。

しかし、海を照らす燈台の多くは便宜上、僻地や離島に建てられることが多くこれを受信することが不可能で、正確な時刻を知るために必ず日時計が備えられました。明治十四年に改定された『守燈方示教総則書』第五章、第二条の「日時計ヲ以テ時刻ヲ制定する事」では「消灯ノ刻限は…中略…燈室ノ時計ニテ定ムヘシ右時計ヲ精密ニナシ置為メ首員ハ少クモ一週間ニ一度其時刻ヲ日時計ノ時刻ニ比較シ各所ニ備ヘ置ク時差表ノ如ク日時計ヨリ増減スヘシ且住家ノ時計モ右同様精密ニナシ置ヘシ」と定められています。日時計は燈台、そこでの仕事に従事する職員に時刻を知らせ、船舶の安全を管理するのみならず職員の生活にも欠かせない大切なものであったことがうかがえます。

現在、菅島燈台附属官舎では、菅島燈台と同県にあり三島由紀夫の小説「潮騒」の舞台となった神島燈台の回転レンズを展示しています。また、据えられている日時計は正確な時刻を示していますので皆さんの時計と比べてみて下さい。

参考文献

・『時計読本』米国ウォルサム時計会社　一九二〇
・海上保安庁灯台協編『日本燈台史』　一九六九　社団法人燈光会

日本の燈台の曙

●品川燈台（3丁目29番地）

明治村三丁目、入鹿池を望む高台の先端にある品川燈台は、日本に現存するレンガ造燈台の中では最古のものになります（写真1）。

この燈台は、明治三（一八七〇）年にフランス人技術者の指導により東京湾沿岸に建てられた四基の燈台の内の一つで、その基本構造は、入り口廻りや基礎（写真2）、螺旋階段（写真3）などに石材を組み込んだ円筒形のレンガ造になっています。また、建築材料であるレンガは、当時建設中であった横須賀製鉄所のレンガを使用しています（写真4・5）。そして、燈室の枠と屋根は、それぞれフランスから輸入された砲金と銅板が用いられています。

この建物の特徴は、明治十九（一八八六）年以前のレンガ造というところにあります。なぜなら、翌年の明治二十（一八八七）年を境にして日本のレンガは大きく変化したからです。その契機は、東京に日本煉瓦製造株式会社が設立され、レンガを高温で焼いて製作する高温焼成の技術が導入されたことです。それ以前の日本のレンガは、薪炭を燃料として七百～八百度程度の比較的低温で焼かれていたため、レンガが焼き締まっておらず、色も赤より薄いミカン色をしていました。レンガに限らず陶器は、高温で焼くほど土の粒子が強く結びついて細かい隙間が減少して密度が高くなります。これを焼き締まった状態と言います。

写真1　品川燈台

写真2　基礎部分

写真3　内部階段

そのため、焼き締まっていない当時のレンガは、隙間が多く（写真6）水を吸収しやすいと考えられます。それに対して、明治二十（一八八七）年に導入された高温焼成の技術で作られたレンガは、石炭を燃料として千百度程度の高温で焼かれているためレンガが焼き締まっており、密度が高く水を吸収しにくいレンガとなり、色は赤色を呈しています。

レンガは、内部に水が浸入すると、中の成分が溶け出して表面に白い結晶が現れ、内部に亀裂や空洞が発生します。また、寒冷地においては、中に浸入した水が氷に変化して体積が膨張することにより、レンガを破壊してしまいます。そのため一般的に、水が浸入する隙間が少ない高温焼成レンガは、隙間が多い低温焼成レンガよりも長持ちすると言えます。

また、明治十九（一八八七）年以前は、厚みのあるレンガを作ることが困難であったため、現代のものより一～二センチ程薄い形のレンガが製作されていました。その後、高温焼成技術の導入により厚いレンガを造れるようになりました。大正十四年にはレンガの大きさは、JES規格で幅一〇センチ・長さ二一センチ・厚さ六センチに規定され、それが現在のJIS規格に踏襲されています（写真7）。

このように、当時のレンガは、色や大きさ性質など現在のものとは若干違っています。これらの点にも注目して見学頂くと、いつもとは違った楽しみ方が出来るのではないでしょうか。また、その際には菅島燈台附属官舎にある品川燈台解体材レンガの展示を是非ご覧ください。

写真4　品川燈台の解体材レンガ

写真5　レンガに押された「ヨコスカ製鉄所」印

写真6　レンガに発生した空隙（孔）

写真7　左・明治初期　右・現代

品川燈台は明治村移築の際、建築基準法の強度規定の問題により構造が煉瓦造からコンクリート造へ変更されました。

参考文献

・素木洋一『図解工藝用陶磁器』伝統から科学へ―』一九七〇　株式会社技報社
・『レンガ造文化財の保存修復』平成十年度文化財保存修復研究協議会記録』一九九九　東京国立文化財研究所